The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語動詞の可變部を語幹構成要素と見做すことの妥當性 : 語幹聲調の位置から導き出される語幹領域
Author(s)	黒木, 邦彦
Citation	語文. 2022, 116-117, p. 249-236
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90802
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

語文116・117（2022・3　大阪大学国語国文学会）

日本語動詞の可變部を語幹構成要素と見做すことの妥當性：語幹聲調の位置から導き出される語幹領域

黒　木　邦　彦

1　はじめに

本研究においては、日本語動詞の語幹領域を、つまり、動詞のどこからどこまでが語幹たるかを定める。具體的には、動詞を構成する要素のうち、（表1: **bold**）のやうに様々に解釋し得る可變部を、（表1a）のやうに語幹の一部と見做す。

表1: 動詞可變部の解釋

	a．語幹の一部		b1．接尾辭の一部		b2．形態音韻的條件に據る插入音素	
	書く	下げる	書く	下げる	書く	下げる
～しない	[kak**a**-na]-i	[sage**r**]-eba	[kak-**a**na]-i	[sage]-**r**eba	[kak-**a**-na]-i	[sage]-**r**-eba
～し	[kak**i**]-**0**	[sage]-**0**	[kak]-**i**	[sage]-**0**	[kak]-**i**-**0**	[sage]-**0**
～すれば	[kak]-eba	[sage-na]-i	[kak]-eba	[sage-na]-i	[kak]-eba	[sage-na]-i
～させる	[kak-ase**r**]-u	[sage**s**-ase**r**]-u	[kak-ase]-**r**u	[sage-**s**ase]-**r**u	[kak-ase]-**r**-u	[sage-**s**-ase]-**r**-u

0: 零形態素　[○]: 語幹　**bold**: 可變部

解釋（表1a）の妥當性は、東京方言・京阪方言動詞の語幹聲調に擔保される。動詞語幹を（表1a）のやうに見れば、その語幹聲調の多くは次掲（1）のやうに一般化できるからである。

（1）　東京方言・京阪方言動詞の語幹聲調は語幹最終子音の位置に基づいて下降調を實現させる。

このことを表2から確認されたい。「ˊ」で示した辨別的ピッチ下降は音調（＝聲調（tone）およびアクセント）の表層形（surface form）である。こゝで、動詞語幹を（表2a）のやうに解釋すれば、辨別的ピッチ下降の位置は語幹最終子音の直前に揃ふ。（表2b）のやうに可變部を語幹外要素と見ては、網掛け部が一般化（1）に違反する。

解釋（表 2a）が導く一般化（1）は、日本語音調史を考察するに良い資料と成る。以上のやうに、動詞の語幹領域を音調との關はりから示し、音調研究に貢獻する一般化を引き出したことが本研究の成果である。

表2: 東京方言第2類動詞の音調

	a．可變部は語幹構成要素		b．可變部は語幹外要素	
	書く	下げる	書く	下げる
～して	[ka$^{\downarrow}$k-i]-te	[sa$^{\downarrow}$ge]-te	[ka$^{\downarrow}$k]-i-te	[sa$^{\downarrow}$ge]-te
～すれば	[ka$^{\downarrow}$k]-eba	[sage-$^{\downarrow}$r]-eba	[ka$^{\downarrow}$k]-eba	[sage]-$^{\downarrow}$r-eba
～しない	[kak-a-$^{\downarrow}$na]-i	[sage-$^{\downarrow}$na]-i	[kak-a-$^{\downarrow}$na]-i	[sage-$^{\downarrow}$na]-i
～させて	[kak-a$^{\downarrow}$se]-te	[sage-s-a$^{\downarrow}$se]-te	[kak-a$^{\downarrow}$se]-te	[sage-s-a$^{\downarrow}$se]-te
～させれば	[kak-ase-$^{\downarrow}$r]-eba	[sage-s-ase-$^{\downarrow}$r]-eba	[kak-ase]-$^{\downarrow}$r-eba	[sage-s-ase]-$^{\downarrow}$r-eba
～させない	[kak-ase-$^{\downarrow}$na]-i	[sage-s-ase-$^{\downarrow}$na]-i	[kak-ase-$^{\downarrow}$na]-i	[sage-s-ase-$^{\downarrow}$na]-i

$^{\downarrow}$: 辨別的ピッチ下降　○: 語幹最終子音　outlined: 脱落要素

2　本研究の構成

本研究は以下のやうに進めていく。はじめに、日本語動詞の形態分析を概觀し、動詞の語幹領域がどのやうに定められてきたかを整理する（§3）。次いで、東京方言と京阪方言とを資料に選び、語幹領域と音調との關はりがどのやうに說かれてきたかを整理する（§4）。そして、先行研究との比較を通じて、語幹領域に對する本研究の解釋を示すと共に、その妥當性を說く（§5）。最後に、本研究が解明したことを整理したのち（§6）、どのやうな課題が殘されてゐるかに言及する（§7）。

3　日本語動詞の形態分析

3.1　國學流と言語學流と

日本語は複統合型（polysynthetic）言語であり、語（word）の意味を接尾要素（e.g., 接尾辭（suffix）、接尾語（enclitic）、補助動詞（auxiliary verb））で加工する（宮岡2002參照）。次掲（2）のとほり、この特徴は名詞や動詞に顯著である。

（2）a.　お－客－さん－商賣－に－だけ－は

<美化>－客－<尊稱>－商賣－<與格－限定－主題>

b. 食べ-させ-られ-續け-て-は-ゐ-ませ-ん-でし-た-けど

食べ$_{る}$-<使役-所動>-續け$_{る}$-<同時-主題>-居$_{る}$-<叮嚀-否定-繫辭:叮嚀-過去-讓步>

-: 要素境界（≠ 接辭境界） <○>: 機能形態素の意味

表3: 日本語動詞の形態分析

	最小單位	不變部	可變部	分析例 書く	下げる	來る
a 國學流	拍ないし音節	不必要	必須	か-**か**-な-**い** か-**き** か-**け**-ば か-**か**-0-**せる**	さ-**げ**-な-**い** さ-**げ** さ-**げれ**-ば さ-**げ**-さ-**せる**	0-**こ**-な-**い** 0-**き** 0-**くれ**-ば 0-**こ**-さ-**せる**
b 言語學流	音素	必須	不必要	kak-**a**-na-i kak-**i**-0 kak-␣-eba kak-␣-ase-**r**-u	sage-␣-na-i sage-␣-0 sage-**r**-eba sage-**s**-ase-**r**-u	ko-␣-na-i ki-␣-0 ku-**r**-eba ko-**s**-ase-**r**-u

-: 要素境界　␣: 要素の空き　**太字**/**bold**: 可變部（ほかは不變部）

このやうな形態的特徴を持つ日本語動詞の形態分析は、國（語）學者が成した文獻學的研究に始まり（e.g., 本居 1806、橋本 1939）、構造主義言語學のもとで發展を遂げた（e.g., Bloch 1946a–b、南 1962、屋名池 1986; 1987a）。どちらの流儀も、構成要素の連續に不變部と可變部（表3: **太字/bold**）とを見出だす點においては共通する。たゞし、分析單位と分析原理とを異にする爲、分析結果には表3のような違ひが生じる（屋名池 1986: 587 を改變し、「不變部」を追加）。

表3のとほり、國學流は語幹に、言語學流は接尾辭に零形態素を立てる。零形態素同士は音調や可變部の選擇から辨別できるので、その設定自體に問題は無い。

兩流儀の長所はそれ〳〵次掲（3–4）のやうに整理できる。

(3) 國學流の長所

a. 日本語表記一般に同じくかなを採用している。

b. 普通教育を通じて、日本國民の大半に教授されてゐる。

(4) 言語學流の長所

a. 言語形式を國學流より精密に（= 音素單位で）記述できる。

b. 國學流が設定する「活用形」も「接續（= 當該要素が接尾し得る活用形）」も必要としない（清瀨 1971 參照）。

表4: 言語學流における動詞可變部の解釋

	a. 語幹の一部 先行研究無し		b1. 接尾辭の一部 Bloch (1946a-b) 尾形 (2001; 2005)		b2. 形態音韻的條件に據る挿入音素 清瀨 (1971) 屋名池 (1986-88b)	
	書く	下げる	書く	下げる	書く	下げる
～しない	[kaka-na]-i	[sager]-eba	[kak-ana]-i	[sage]-reba	[kak-a-na]-i	[sage]-r-eba
～し	[kaki]-0	[sage]-0	[kak]-i	[sage]-0	[kak]-i-0	[sage]-0
～すれば	[kak]-eba	[sage-na]-i	[kak]-eba	[sage-na]-i	[kak]-eba	[sage-na]-i
～させる	[kak-aser]-u	[sages-aser]-u	[kak-ase]-ru	[sage-sase]-ru	[kak-ase]-r-u	[sage-s-ase]-r-u

i 解釋（a）に近いものは Zamma（1992）。そのほか、南（1962）や下地（2018）のやうに、母音可變部のみを語幹の一部と見る研究も有る（琉球諸語の文法記述においてはこれが一般的か）。

記述の精度と道具立ての輕さとを考慮すれば、後發の言語學流を措いて、國學流を敢へて採用することは合理性に乏しい。（後發が劣るやうでは話しに成らないので、これは當然であるが。）

3.2　動詞可變部の解釋

言語學流においては動詞可變部の解釋がしば／＼俎上に載る。可變部の分析を異にする說（e.g., Zamma 1992）を除けば、考へられる解釋は表4のみっつである。たゞし、そのいづれが最も妥當たる（= 經濟的・合理的であり、かつ、通時的說得力も有する）かは、分節音レベルの分析だけでは必ずしも示し得ない。(1)

そこで、本研究は動詞の語幹領域を音調との關はりから定める。具體的には、東京方言と京阪方言とを資料に選び、動詞可變部を語幹構成要素と見る解釋（表 4a）の妥當性を音調との關はりから說く。

4　東京方言・京阪方言動詞の語幹聲調

東京方言および京阪方言は、辨別的ピッチ下降（以下「辨別的下降」）の位置を語彙的に指定してゐるアクセント方言（↔ 語聲調(word-tone)方言; 早田1999參照）の代表格である。たゞし、用言（= 動詞および形容詞）には、一定領域內に何らかのピッチ型で實現する語聲調がアクセントと共存してゐる（McCawley 1968、屋名池1987b; 1992、尾形2001; 2005參照）。

本研究が兩方言を資料に選んだ理由は、兩方言の動詞音調が語幹領域を示唆してゐることに有る。興味深いことに、動詞に生じる辨別的下降の多くは語末邊り、よ

り正確には、語幹末邊りに集中してゐるのである（Bloch 1946a–b、McCawley 1968、屋名池1987b; 1992、尾形2001; 2005、京言葉、わたさんの大阪弁アクセント講座參照）。このことを表5から確認されたい。音調に當たる辨別的下降は、（a）東京方言においては、金田一（1974）に言ふ第2類動詞（e.g., 書く、下げる、來る）に、（b）京阪方言においては、第1類（e.g., 置く、上げる、爲(す)る）と第2類との兩方に觀察される。

表5: 語幹末邊りに集中する辨別的ピッチ下降

	a. 東京				b. 京阪			
	置く	上げる	書く	下げる	置く	上げる	書く	下げる
～して ～した	LHH	LHH	**HL**L	**HL**L	**HL**L	**HL**L	L**HL** LL**F** LLH	L**HL**
～すれば	LHL	LHHL	**HL**L	L**HL**L	**HL**L	H**HL**L	L**HL**	L**HL**L
～しない	LHHH	LHHH	L**HL**L	L**HL**L	H**HL**L	H**HL**L	L**HL**L	L**HL**L
～する	LH	LHH	**HL**	L**HL**	HH	HHH	LH	LLH
～させて	LHHH	LHHH	L**HL**L	LH**HL**L	H**HL**L	HH**HL**L	L**HL**L	LL**HL**L
～させれば	LHHHL	LHHHHL	LH**HL**L	LHH**HL**L	HH**HL**L	HHH**HL**L	LL**HL**L	LLL**HL**L
～させない	LHHHH	LHHHHH	LH**HL**L	LHH**HL**L	HH**HL**L	HHH**HL**L	LL**HL**L	LLL**HL**L
～させる	LHHH	LHHHH	LH**HL**	LHH**HL**	HHHH	HHHHH	LLLH	LLLLH

H: 相對的高ピッチ　L: 相對的低ピッチ　F: H から L への音節・下降　**bold**: 辨別的下降

表5のとほり、動詞に生じる辨別的下降の位置は一見不揃ひである。しかし、形態素（e.g., 語根、接尾辭、接尾語）の音調情報を音韻規則で處理する記法に據れば、音調情報の位置は一定と成る。このやうに考へる研究者の多くは東京方言・京阪方言の動詞音調を次掲（5）のやうに見てゐる（e.g., McCawley 1968、木部1983、屋名池1987b; 1992、Zamma 1992、尾形2001; 2005、千田2020）。

（5）　東京方言・京阪方言の動詞音調（千田2020: §3.1の記述に筆者が增補）

a.　音調情報は形態素に登錄されてゐる。

b.　動詞の音調は第一に語幹領域(2)に現はれる。

c.　語幹聲調（5b）は語幹次末尾拍(mora)（を含む音節）に現はれる。

表6: 東京方言第2類動詞の音調

	a. 可變部は語幹構成要素		b. 可變部は語幹外要素	
	書く	下げる	書く	下げる
～して	[ka↓k-i]-te	[sa↓ge]-te	[ka↓k]-i-te	[sa↓ge]-te
～すれば	[ka↓k]-eba	[sage-↓r]-eba	[ka↓k]-eba	[sage]-↓r-eba
～しない	[kak-a-↓na]-i	[sage-↓na]-i	[kak-a-↓na]-i	[sage-↓na]-i
～させて	[kak-a↓se]-te	[sage-s-a↓se]-te	[kak-a↓se]-te	[sage-s-a↓se]-te
～させれば	[kak-ase-↓r]-eba	[sage-s-ase-↓r]-eba	[kak-ase]-↓r-eba	[sage-s-ase]-↓r-eba
～させない	[kak-ase-↓na]-i	[sage-s-ase-↓na]-i	[kak-ase-↓na]-i	[sage-s-ase-↓na]-i

↓: 辨別的ピッチ下降　□: 語幹最終子音　outlined: 脱落要素

表7: 語幹聲調後方移行規則

a. 書く				b. 下げる			
1	2	3	4	1	2	3	4
ka'k-i	ka'k-te	ka'k-u	ka'k-eba	sa'ge-Ø	sa'ge-te	sa'ge-ru	sa'ge-ru
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
ka↓ki	ka↓ite	ka↓ku	ka↓keba	sa↓ge	sa↓gete	sage↓ru	sage↓ru

': 語幹声調

5　動詞の語幹領域

5.1　語幹最終子音への注目

動詞の語幹領域に對する解釋は研究者ごとに異なるが、前掲（表4a）と解釋を違へる點においては共通してゐる。音調との關はりに目を向けても、語幹領域（表4a）を支持 / 採用する先行研究は存在しないのである。しかし、尾形（2001; 2005）に倣って、語幹聲調が語幹最終子音（≠ 語幹末子音）の位置に據ってゐると見れば、最も妥當な語幹領域は（表4a: [○]）と成る。このことを表6から確認されたい。（表6a）のやうに動詞可變部を語幹構成要素と見做せば、語幹聲調に當たる辨別的下降が語幹最終子音の直前に揃ふ。（表6b）のやうに可變部を語幹外要素と捉へては、網掛け部がこの一般化に違反する。

語幹聲調との關はりから語幹最終子音に注目する先行研究は、尾形（2001; 2005）のみである。（5c）に述べたとほり、先行研究の多くは語幹聲調の位置を語幹次末尾

拍と見てゐる。しかし、McCawley（1968: §3.6）から分かるとほり、語幹聲調の位置に對する次末尾拍解釋は、（表7b: 3–4）に擧げる語幹聲調後方移行規則（McCawleyの用語では「accent attraction rule」）を必要とする。この規則を餘計に立てねばならぬ點において最終子音解釋に劣る。

表8: 動詞の語幹領域に對する解釋の違ひ

	a. 本研究		b. Zamma (1992)	
	書く	下げる	書く	下げる
～し	[ka↓k-i]-0	[sa↓ge]-0	[ka↓k-i]-0	[sa↓ge]-0
～する	[ka↓k]-u	[sage-↓r]-u	[ka↓k-u]-0	[sage-↓ru]-0
～すれば	[ka↓k]-eba	[sage-↓r]-eba	[ka↓k-e]-ba	[sage-↓re]-ba
～しろ	[ka↓k]-e	[sage-↓r]-o	[ka↓k-e]-0	[sage-↓ro]-0
～させ	[kak-a↓se]-0	[sage-s-a↓se]-0	[kak-a↓se]-0	[sage-s-a↓se]-0
～させる	[kak-ase-↓r]-u	[sage-s-ase-↓r]-u	[kak-ase-↓ru]-0	[sage-s-ase-↓ru]-0
～させれば	[kak-ase-↓r]-eba	[sage-s-ase-↓r]-eba	[kak-ase-↓re]-ba	[sage-s-ase-↓re]-ba
～させろ	[kak-ase-↓r]-o	[sage-s-ase-↓r]-o	[kak-ase-↓ro]-0	[sage-s-ase-↓ro]-0

5.2　語幹領域の是非

5.2.1　尾形（2001; 2005）の語幹領域

動詞の語幹聲調が語幹最終子音に據ってゐると見る研究は、前述のとほり尾形（2001; 2005）のみである。語幹最終子音解釋の利點は前節において確認したとほりであるが、尾形に言ふ語幹は前掲（表6a: [○]）ではなく、（表6: [○]）なのである。語幹を（表6b）のやうに見ては、非過去の連體節等を作る /–u ～ –ru/ 形や、假定條件の副詞節を作る /–eba ～ –reba/ 形の語幹聲調が、これと言った理由も無く、語幹最終子音の直前から外れてしまふ（（表6b: 網掛け部）參照）。尾形はこの例外を處理する爲に、/–u/, /–eba/ の異形態に當たる /–ru/, /–reba/ の /r/ を特別に語幹構成要素とする（つまり、例外を例外的規則で處理する）。

しかし、（表6a）のやうに動詞可變部を語幹構成要素としておけば、そのやうな處理は要らない。よって、採用するべき解釋はやはり（表6a）である。

5.2.2　Zamma（1992）の語幹領域

5.2.2.1　語幹の設定に關する問題

Zamma（1992）は、國文法に言ふ動詞の連用形、連體形、已然形、命令形を語幹

とし、語幹聲調が語幹次末尾拍に有ることを示した研究である。

表8のとほり、Zammaが定める語幹（表8b: [○]）は、本研究が採用する（表8a: [○]）とも、前節において棄却した（表6b: [○]）とも異なる。語幹聲調の位置を語幹次末尾拍の直後に一定させることを優先してか、（表8b: 網掛け部）のやうに複數の零形態素を認めてゐる。これら零形態素は動詞可變部の違ひから辨別できるものゝ、零形態素が複數存在することには何らかの説明を與へねばならない。

語幹聲調位置の一般化に因る皺寄せは可變部にも及んでゐる。（表8b）のとほり、「～し」「～させ」の可變部は1～0音素で交替する /-i ~ -∅であるが、そのほかの可變部は1～2音素で交替する /-u ~ -ru/, /-e ~ -re/, /-e ~ -ro/ であり、音素數を違へてゐる。更に、/sage-/ と、それより1拍（も）長い /sage-ru-, sage-re-, sage-ro-/ とを語幹として同一視することの是非も問はれる。

このやうに、語幹（表8b: [○]）の設定は種々の問題を孕んでゐる。たゞし、この問題の回避は難しいことではない。（表8b: [○]）より設定に無理の無い（表6a, 表8a: [○]）を採用し、語幹聲調が語幹最終子音に據ってゐると捉へ直せば良いのである。

表9: 動詞語幹の派生關係

	舞；回	摘	浮	開；明	解；溶	分	渡	下
a. C-	map-	tum-	uk-	ak-	tok-	wak-	-	-
b. C(-)a-	map-a-	tum-a-	uk-a-	ak-a-	tok-a-	wak-a-	wata-(r-a-)	kuda-
c. C-e$_{(z)}$-	-	-	uk-e$_{\angle}$-	ak-e$_{\angle}$-	tok-e$_{\angle}$-	wak-e$_{\angle}$-	-	-
d. C(-)a-r	map-a-r-	-	uk-a-r-	ak-a-r-	-	wak-a-r-	wata-r-	kuda-r-
e. C(-)a-s-	map-a-s-	-	uk-a-s-	ak-a-s-	tok-a-s-	-	wata-s-	kuda-s-
f. C(-)a-C-	-	tum-a-m-	uk-a-b-	-	-	wak-a-t-	wata-r-a-p-	-

5.2.2.2　未然形相當語幹

本研究が採用する語幹（表6a, 表8a: [○]）は、國文法の未然形に相當する / ... C-a- ~ ... V-/（e.g., /**kak-a**-na-i/ ‘書かない’, /**sage**-na-i/ ‘下げない’）も含む。この點において、Zammaの語幹より廣い外延である。/ ... C-a- ~ ... V-/ を語幹と見做すことの根據は、項構造（argument structure）や意味に影響する、とりわけ、古代語において生産的であった語幹派生から / ... C-a-/（e.g., ak-a- ‘開く’, map-a- ‘舞ふ’, wata- ‘渡’）が抽出されることに有る。このことを表9から確認されたい。下二段動詞のe終はり語幹（表9c）も、/ ... C(-)a-r-/ 等の子音終はり語幹（表9d-f）も、次掲（6）のやうに / ... C(-)a-/（表9b）から派生したものであらう。

(6)　C–→ C–a–（a添加）→ C–a–i–（i添加）→ C–e$_{(乙)}$–（ai融合）
→ C–a–r/s/p/b/m/t–（C添加）

表10: 京阪方言第1類動詞の音調

	a．可變部は語幹構成要素		b．可變部は語幹外要素	
	置く	上げる	置く	上げる
～して	[o↓ki]-te	[a↓ge]-te	[o↓k]-**i**te	[a↓ge]-te
～すれば	[o↓k]-eba	[age↓**r**]-eba	[o↓k]-eba	[age]-**↓r**eba
～しない	[ok**a**-↓na]-i	[age-↓na]-i	[ok-**a**↓na]-i	[age-↓na]-i
～させて	[ok-a↓se]-te	[age**s**-a↓se]-te	[ok-a↓se]-te	[age-**s**a↓se]-te
～させれば	[ok-ase↓**r**]-eba	[age**s**-ase↓**r**]-eba	[ok-ase]-**↓r**eba	[age-**s**ase]-**↓r**eba
～させない	[ok-ase-↓na]-i	[age**s**-ase-↓na]-i	[ok-ase-↓na]-i	[age-**s**ase-↓na]-i

表11: 京阪方言第2類動詞の音調

	a．可變部は語幹構成要素		b．可變部は語幹外要素	
	書く	下げる	書く	下げる
～して	[ka↑ki]-↓te	[sa↑ge]-↓te	[ka↑k]-**i**↓te	[sa↑ge]-↓te
～すれば	[ka↑k]-e↓ba	[sa↑ge↓**r**]-eba	[ka↑k]-e↓ba	[sa↑ge]-↓**r**eba
～しない	[ka↑k**a**-↓na]-i	[sa↑ge-↓na]-i	[ka↑k-**a**↓na]-i	[sa↑ge-↓na]-i
～させて	[ka↑k-a↓se]-te	[sage↑**s**-a↓se]-te	[ka↑k-a↓se]-te	[sage-↑**s**a↓se]-te
～させれば	[kak-a↑se↓**r**]-eba	[sage**s**-a↑se↓**r**]-eba	[kak-a↑se]-↓**r**eba	[sage-**s**a↑se]-↓**r**eba
～させない	[kak-a↑se-↓na]-i	[sage**s**-a↑se-↓na]-i	[kak-a↑se-↓na]-i	[sage-**s**a↑se-↓na]-i

この / ... C–a–/ は、動詞の可變部を語幹構成要素と見る解釋（表 4a）においてのみ設定される語幹である。（表 4a）に擧げた語幹 / ... C–i– ~ ... V–/, / ... C– ~ ... V–r–/, / ... C– ~ ... V–s–/ に同じく活用する（= 種々の接尾辭を取り得る）ことから、語幹のひとつと認めて良からう。

以上のとほり、動詞の語幹聲調も語幹（表 9c–f）の派生も上手く説明する解釋は（表6a, 表8a）である。

6　結論

本研究は、動詞を構成する要素のうち、（表4: **bold**）のやうに様々に解釋し得る

可變部を、(表4a) のやうに語幹の一部と見做す。この解釋の妥當性は、東京方言・京阪方言動詞の語幹聲調に擔保される。解釋 (表4a) に據れば、その語幹聲調の多く (≠ 全て; 詳しくは§7にて) は次掲 (7) のやうに一般化できるからである。

表12: 京阪方言第2類動詞 /sage-te/ のピッチ形成

	低起のみ	語幹アクセントのみ	折衷
基底形	[ˢsage]-te	[sa'ge]-te	[ˢsa'ge]-te
ピッチ	[LL]L	[HL]L	[LH]L

表13: 一般化 (7) に反する東京方言第2類動詞の音調

	置く	上げる	書く	下げる
〜せず	[ok-a]-zu	[age]-zu	[ka↓k-a]-zu (舊) [kak-a]-↓zu (新)	[sage]-↓zu
〜しよう	[ok]-o↓o	[age-j]-o↓o	[kak]-o↓o	[sage-j]-o↓o
〜しまい	[ok]-uma↓i	[age-r]-uma↓i	[kak]-uma↓i	[sage-r]-uma↓i
〜しながら	[ok-i]-nagara	[age]-nagara	[kak-i]-na↓gara	[sage]-na↓gara

(7) 東京方言・京阪方言動詞の語幹聲調は語幹最終子音の位置に基づいて下降調を實現させる。

前掲 (表6a, 表8a) を再度參照されたい。東京方言第2類動詞が持つ語幹聲調の多くは實際にさう成ってゐる。

次いで、表10-11に京阪方言動詞の音調を示す。表10を踏まへるに、同方言においては第1類も語幹聲調を有してゐると考へられる。京阪方言動詞の語幹聲調も、(表10-11a) のやうに動詞の可變部を語幹構成要素と見れば、前掲 (7) に同じく一般化できる。

語幹聲調に當たる辨別的下降は、第1類においては語幹最終子音の直前に集中する。一方、第2類においては必ずしもさうではない。(表11a: 網掛け部) のとほり、一部の辨別的下降は語幹最終子音を通り越し、語幹領域の右外側に生じるのである。これは、語幹が持つ音調情報2種のうち、低起といふ語聲調(word-tone)をアクセントに優先させた爲である。表12のとほり、語幹の拍數が少ない中で低起に1拍を充てた結果、辨別的下降が語幹領域の右外側に押し出されてしまったのである。

表14: /ᵃ-m/ から /ʲ-oo/ への變移

a. 第1類		b. 第2類	
1. 置かう	2. 上げよう	1. 書かう	2. 下げよう
*[ok-a-↓m]-u	*[age-↓m]-u	*[kak-a-↓m]-u	*[sage-↓m]-u
↓	↓	↓	↓
*[ok]-a↓u	*[age]-↓u	*[kak]-a↓u	*[sage]-↓u
↓	↓	↓	↓
[ok]-o↓o	[age-j]-o↓o	[kak]-o↓o	[sage-j]-o↓o

表15: /ᵘ-mazi/ から /ʳ-umai/ への變移

a. 第1類		b. 第2類	
1. 置くまい	2. 上げるまい	1. 書くまい	2. 下げるまい
*[ok-u-ma↓zi]-0	*[agu-ma↓zi]-0	*[kak-u-ma↓zi]-0	*[sagu-ma↓zi]-0
↓	↓	↓	↓
[ok]-uma↓ʒi	*[agu]-ma↓ʒi	[kak]-uma↓ʒi	*[sagu]-ma↓ʒi
	↓		↓
	[age-r]-uma↓ʒi		[sage-r]-uma↓ʒi

7　今後の課題

7.1　一般化（7）から外れる動詞の音調

本研究は動詞の語幹領域を定めるにあたって、語幹聲調を手掛かりとした。行論の都合から、語幹聲調が一般化（7）に適ふ動詞形態を選拔したのであるが、實際にはこの一般化から外れるものも少なくない[(3)]。たとへば、東京方言からは表13のやうな反例が擧げられる。たゞし、「～しながら」以外の形態に現れる辨別的下降は語幹聲調の反映とも考へられる。

まづ、「～せず」の音調を考察する。表13に（舊）と記した舊形態の音調は、一般化（7）に適ふ語幹聲調である[(4)]。新形態においてはなぜか、（7）から外れる型に轉じてゐるが[(5)]、古くは語幹最終子音に據ってゐたのである。

次いで、「～しよう」「～するまい」の音調を考察する。兩者の音調はその位置を踏まへるに、語幹聲調には見えない。しかし、（i）第1類と第2類とが中和し、後者に合流してゐることゝ、（ii）/ʲ-oo/, /ʳ-umai/ が古代語の動詞派生接尾辭 /ᵃ-m-/ ＜非現實＞, /ᵘ-mazi-/ ＜不當＞に由來することゝを考慮すれば、語幹聲調と考へられなくもない。動詞派生接尾辭の中には、語幹聲調を中和させるもの（屋名池 1988a-b に

言ふ「延長要素B類」）が存在するからである（e.g., ［東京］/^{i}-ta-/<願望[(6)]>, /^{i}-mas-/ <叮嚀>; ［豐後日田］/^{a}-n-/ <否定>）。

/^{j}-oo/, /^{r}-umai/ から /^{a}-m-/, /^{u}-mazi-/ への變移としては表 14-15 を想定してゐる。このやうな、歴史的事情を踏まへた解釋が許されるか否かは、何よりもまづ、歴史的資料との整合性に懸かってゐる。現時點においては力量不足からこの問題に觸れることができないので、今後の檢討課題としたい。

7.2　他の日本語變種

動詞の語幹聲調を前掲（7）のやうに一般化できる日本語變種は、必ずしも一般的ではない（話者人口的には一般的やも）。少なくとも、九州西南部に分布する語聲調方言（いはゆるn型アクセント方言）に（7）のやうな語聲調現象は觀察されない。

語聲調方言を離れて、東京方言・京阪方言に同じアクセント方言を見渡しても、（7）のやうに一般化できないものが見附かる。たとへば、遠州濱松方言がさうであると屋名池（1988b: §3-1-3）が指摘してゐる[(7)]。同方言においては語幹聲調の位置が語幹頭から計算されるのである。濱松市には更に、語幹の拍數（奇數/偶數）に據って語幹聲調の位置を變へる變種も有る（角道正佳氏よりの指摘。於日本語學會2021年度秋季大會ワークショップ）。高知方言の動詞音調も（7）とは異なる（同じく角道正佳氏より）。語幹聲調（7）がどの時空間にどの程度存在するかも、現時點においては力量不足から殆んど檢討できてゐない。これも今後の課題である。

注

(1)　下地（2018: §7.2.4）が示すとほり、伊良部島方言の動詞可變部を定めるにあたっては、記述の經濟性のみならず、語形態（こゝでは音素配列や許容される短縮形）も考慮せねばならぬ。たゞし、日本語變種の多く（e.g., 東京方言、京阪方言）はさうではない。

(2)　木部（1983）においては國文法の活用形。たゞし、動詞語幹の派生は考慮されてゐない。

(3)　語幹聲調を一般化する範圍を「多く（≠ 全て）」に留めたのはこの爲。

(4)　この舊形態は「情けは人の爲なˈらず」や將棋用語の「成ˈらず」に根強く殘ってゐる。

(5)　千田（2020: §3.3）が指摘するとほり、東京方言に種々存在する動詞の否定形態は辨別的下降の位置を共有してゐる。具體的には、當該接尾辭の先頭子音を語幹最終子音と捉へてゐるかのやうな辨別的下降を持つ（e.g., 書かˈない, 書かˈないで, 書かˈず, 書かˈぬ, etc.）。

(6)　たゞし、連體節においては對立を殘す話者も有る（e.g., 拭きたい笛 :: 吹きたˈい笛）。

(7)　「名古屋方言（付表12）や岡崎方言（付表11）・松江方言（付表3）にも部分的にそうした箇所がある」らしいが、先行研究を見た限りでは斷言できない。

参考文獻

尾形 佳助（2001）「京阪式動詞アクセントの見方」『文林』35: 13-75、神戸松蔭女子學院大學國文學研究室

尾形 佳助（2005）「京阪式動詞音調論再考」『文林』39: 1-81、神戸松蔭女子學院大學國文學研究室

木部 暢子（1983）「用言の活用形とアクセント」『文献探究』12: 1-10、文獻探究の會

清瀬 義三郎 則府（1971）「連結子音と連結母音と : 日本語動詞無活用論」『國語學』86: 42-56、國語學會

金田一 春彦（1974）『国語アクセントの史的研究　原理と方法』塙書房

下地 理則（2018）『南琉球宮古語伊良部島方言』くろしお出版

千田 俊太郎（2020）「日本語の動詞の語幹とアクセントに關する覺え書き」『ありあけ』19: 1-32、熊本大學文學部言語學研究室

早田 輝洋（1999）『音調のタイポロジー』大修館書店

橋本 進吉（1939）『改制新文典別記　文語篇』冨山房

南 不二男（1962）「三　文法」国語学会（編）『方言学概説』pp. 209-55、武藏野書院

宮岡 伯人（2002）『語とは何か　エスキモー語から日本語をみる』三省堂

本居 春庭（1806）『詞八街』［勉誠社文庫 : 1808年版、尾崎 知光（編）、1990年］［國立國會圖書館デジタル コレクション : 1884年版上・下］

屋名池 誠（1986）「述部構造 : 現代東京方言述部の形態＝構文論的記述」『松村明教授古稀記念　国語研究論集』: 583-601、明治書院

屋名池 誠（1987a）「活用 : 現代東京方言述部の形態＝構文論的記述〔2〕」『学苑』565: 194–208、昭和女子大學近代文化研究所

屋名池 誠（1987b）「述部のアクセント : 現代東京方言述部の形態＝構文論的記述〔3〕」『学苑』573: 91-106、昭和女子大學近代文化研究所

屋名池 誠（1988a）「語 : 現代東京方言述部の形態＝構文論的記述〔4〕」『学苑』577: 199–209、昭和女子大學近代文化研究所

屋名池 誠（1988b）「述部のアクセント・第2: 現代日本語諸方言による記述方法の検証と拡大」『学苑』578: 97-110、昭和女子大學近代文化研究所

屋名池 誠（1992）「上方ことばのアクセント」『上方の文化 : 上方ことばの今昔』上方文庫 13: 1–59、大阪女子大學國文學研究室

Bloch, Bernard. (1946a). Studies in Colloquial Japanese : I. Inflection. *Journal of the American Oriental Society*. 66 (2) : 97-109.

Bloch, Bernard. (1946b). Studies in Colloquial Japanese : III. Derivation of inflected words. *Journal of the American Oriental Society*. 66 (4) : 304-15.

McCawley, James D. [1965] (1968). *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague, Paris : Mouton.

Zamma, Hideki. (1992). The accentuation system of Japanese inflection. *Tsukuba English Studies*. 11: 117-48.

Webサイト

京言葉 : https://www.akenotsuki.com/kyookotoba/（2021年10月31日最終閲覧）

わたさんの大阪弁アクセント講座 : http://immanuel.sakura.ne.jp/hoby/osakaben/osakaben.htm（2021年10月31日最終閲覧）

謝辭等

調査協力者、學友、そして、學會等にてご意見下さった方々に記して感謝申し上げる。本研究が受けた次の研究助成にも併せて感謝したい。

・JSPS科研費 : 16K13227、17K02689、19H01265
・宮地裕名譽教授記念基金（大阪大學大學院文學研究科）: ポスドク研究支援「鹿児島県北西部方言における述部の語形成とアクセント形成」2010年度
・國立國語研究所 : 人間文化研究機構連携研究「鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危惧方言のアクセント調査」2011-14年度

修了後も一應は勉強し續けてゐることを金水先生にお見せしたく、學生時代の研究課題とは異なるものを選びました。金水先生、ご退官を以って隱遁などなさらず、益々ご活躍下さい。

飯倉先生とは、こちらの能力不足から學生時代にはさほど接點を持てなかったのですが、ブログやSNSは愛讀してをります。國際的にも活躍していらっしゃるお姿に勝手に觸發され、こゝ數年は僕も國外に出てゐます。活躍してゐるとはとても言へませんが、引き續き頑張ります。

（くろき・くにひこ　神戸松蔭女子学院大学）